



白神山地を巡る自然観察会に参加して（2018. 7）

地球環境自然科学講座生・船本浩路

<はじめに>

今回は7月16~18日までの2泊3日、総勢30名の世界自然遺産・白神山地ブナ林観察会の旅である。田中先生のコーディネートによる観察会も今年で4年目。豊かな恵みある自然とそれを支える人々を求めて、訪れた地域も東北から九州まで全国に広がっている。今回の観察会は皆さんの関心が高かったのか、申込者が多くて抽選となり半数近くの方があぶれたようだ。

猛暑の大坂を午前11時半に発ち、約一時間半で青森空港に着いた。ここからバスで鰺ヶ沢町の種里城跡（弘前藩主である津軽氏発祥の地で大浦光信公の館跡）近くにある白神自然学校ツーリング校に向かった。周囲に実が少し大きくなり始めたたくさんのリンゴの木が目に入るとともに青森のシンボル岩木山（岩木富士）の美しい姿が車窓を楽しませてくれた。また、途中の五所川原では大きく（高さ22m）て、迫力のある立佞武多を見学した。リンゴの木、岩木富士、佞武多の三つが揃えば青森に来たという実感が湧いてきた。

白神山地周辺には過去二回行ったことがある。しかし、いずれも木も見ていなければ森も見ていない。それでは何を見ていたのか？一回目は白神山地の渓流にてヤマメ、イワナ釣りをしていたのである。二回目は18きっぷでJR東日本の人気路線の五能線を乗車するためだけのものであった。今回は、白神山地の自然を知り尽くしている「白神山地を守る会」代表の永井雄人さんに自然学講座での事前学習はもとより、観察ツアーのすべてをサポートしていただくという贅沢な企画が示されたので、この機会に白神の森を見ようと意気込んで参加した。



＜レンジャーによる白神山地のレクチャーなど＞

初日は白神山地裾野にある白神自然学校ーツ森校（廃校になった小学校を活用している）で、大の大人が小学生用の小さな机を前に椅子に座り、永井代表から白神山地のレクチャーを受けた。木造の教室は遙か遠い時代に学んだ記憶を思い起こさせた。また、夕食は地区の方々による豪華ではないがネマガリタケやミズ（ウワバミソウ）の一本漬けなど土地の食材を使った心温まる手づくり料理を味わった。マタタビ酒やトチバニンジンの根を浸けた薬酒もいただいた。夜は小学校の他に地元農家と校長用の官舎に分宿した。



そして二日目はいよいよブナの森に入る。その前に青森県西目屋自然保護官事務所の西田レンジャー（環境省）からレクチャーを受けた。日本の世界自然遺産は、①白神山地（青森県、秋田県 1993 年登録）、②知床（北海道 2005 年登録）、③小笠原（東京都 2011 年登録）④屋久島（鹿児島県 1993 年登録）の 4 つがある。自然遺産に登録されるには、4 つの評価基準（クライテリア）、つまり①自然美、②地形地質、③生態系、④生物多様性のうち一つ以上に適合する必要がある。白神山地はこのうち③の生態系に適合して屋久島と同じ年に日本で初めて登録された。



環境省の資料に基づいて登録理由（普遍的価値）をもう少し詳しくお示しすると、「白神山地（1000m級）は東アジアで最大級の原生的なブナ林（1万7千ha）。日本のブナ林の多くは、かつて伐採されスギなどの人工林に置き換えられてきたが、白神山地は都市部から遠く離れ、地形が険しいこともあり、人の影響をほとんど受けなかった。ブナ林は、約3千万年前には北極周辺に存在していたが約7万年前から1万年前まで続いた氷期の時代、ブナ林は寒さから逃れるために暖かい南の方へ移動した。その際、ヨーロッパなど世界の多くの地域ではアルプスなどの高山に阻まれブナ以外の植物は南下できず、南下できたブナ林は貧弱な植生となった。しかし、日本ではブナ以外の植物も南下できたため、約3千万年前の植物に近い、他にはない豊かなブナ林が残され、これが他にはない多様性に富んだ豊かな生態系のある森として評価された。事実、アオモリマンテマなどの地域固有の植物をはじめ、500種以上の植物が生育し、また動物ではイヌワシやクマゲラをはじめとする希少な鳥類や、カモシカやツキノワグマをはじめ、14種の中大型哺乳類、94種の鳥類、約2000種の昆虫類などが生息しているという。

<いざブナの森の中へ>

ブナは北海道（渡島半島黒松内）から南は鹿児島（大隅半島の高隅山）まで分布している。大阪府にも和泉葛城山のごく限られたところに分布している。ここのブナは標高 1000m を超えないレベルでの南限のブナ林として国の天然記念物の指定を受けている。しかし気温上昇も影響してか最近衰弱しているという。ブナは森林帯で見れば冷温帯の極相林となる主要な木である。このため大阪のように暖温帯では分布が限られている。普段スギ・ヒノキと常緑樹を見慣れている我々には馴染みの薄い木である。にもかかわらず、樹林が美しく、多様性や保水力が高いことや人の手がかかっていない原生林であることから素晴らしい森のイメージが強く浮かんでくる。それはテレビ等でそのような映像が放映されるのを目にするからもあるし、やはり白神のブナ林が世界遺産になったことが大きく影響しているのだろうと思う。

さあ、そんなイメージを持って森に入ったが、あいにくの雨である。中型バスで道狭くダートもある山地内を走ったが、雨のせいもあるのか車窓からの霞んだ森は変化もない単調な景色に見えた。一体この森のどこが世界遺産というのであろうとの気持にもなったが、いざ森（マザーツリーと奥赤石ブナ遺伝資源保存林、全員図参）の中に足を踏み入れると、そのようなイメージは払しょくされた。まず感じたのはブナの森は実に明るいのである。葉色は濃い緑でなく薄緑色が強い。大木を下から見上げるようにして森を散策したがブナを主体とする落葉広葉樹の葉は薄いからであろうか、光を通して映る葉々はまるで緑のフィルターのようだった。スギ・ヒノキと常緑樹中心の大森の森とは雰囲気がまる





ハウチワカエデ



ホウノキ

で違っていることが一目でわかる。また、この緑のフィルターを通して林内に光が入るのだろうか、林床にもオオバクロモジなどの緑が一杯に広がっている。森全体が光を効果的に利用しているようで豊かな生態系が形成されることも当然のように思えた。ブナ、サワグルミ、ホオノキ、トチノキ、ハウチワカエデ、カツラ、ムシカリ、トチバニンジン、ミヤマガマズミ、エゾアジサイ、フキなどが目立った。もう少し時間をかけ歩き、いろいろな植物のレクチャーを受けたかった・・・。

その後、津軽沢林道付近に移動して永井代表が今までにコツコツと植樹してきた場所にて、我々も守る会が白神自然学校で実生から育てたブナの若木を植えた。ここは植林されたスギ林であるがこのスギを段階的に間引いて将来的にはブナの森にしていくことであった。



ブナの実（熊の好物）

<十二湖の神秘>

この後、鰺ヶ沢の町にある二日目の宿泊地に向かった。昨日とは打って変わって海辺の近代的で洒落たホテルである。部屋から日本海が眺められた。温泉もよく夕食の海の幸も美味かった。この海では高級魚のヒラメがよく捕れるらしい。天気が良ければ日本海に沈む夕日が素晴らしいとのこと。昨日は森の中に、今日は海辺に宿泊である。鰺ヶ沢町は白神の森を源流とする赤石川があり、鰺ヶ沢の里があり、美しい海岸がある。まさに森川里海がセットになっている土地だ。

翌朝、鰺ヶ沢から海岸沿いにJR十二湖駅までバスで走った。白神山地が海岸まで迫り森と海が実に近い。そこから山道に入りしばらくすると十二湖に着いた。美しいブナ林に囲まれた全部で 33 の湖沼群がある津軽国定公園である。江戸時代に発生した大地震による山崩れによってできたといわれている。十二湖という名前の由来は、十二湖の東側にある崩山から見ると小さな湖が森に隠れて、大きな 12 の湖だけが見えることからこのように呼ばれるようになったそうだ。透き通った群青色の水が美しい青池が特に有名だ。天気によってその色は変わるという。当日は雨模様の中、写真のような色であった。幻想的な池風景をバックに記念写真となった。



<熊との遭遇>

話が前後するが、二日目の朝に熊に出会った。自然の中での対面は生まれて初めてのことである。出発時に旅行バックにイワナ・ヤマメ用の渓流竿を忍ばせた。白神山地に源流を発する赤石川が白神自然学校近くを流れていることを事前にグーグルで確認して、現地でも前日夕方に

下見をしておいた。短い時間しか取れないが早朝に起きてワクワクしながら川に出かけた。昨日確認したポイントに着き、堤防を降りると真っ黒な、そして少し動いているようなものが川の対岸に見えたので慌てて戻った。よく見ると熊であった。二頭が草むらで何かを食べていたように見えた。これとは別にもう一頭、少し離れた所にいた。学校に戻り永井さんに報告した。しばらくすると町の有線放送で熊出没情報が流れた。その後警察もパトロールにやって来た。やはり皆さん熊を警戒していることが頷けた。この川はイワナ、ヤマメはもとより金アユ（お腹が金色に輝くアユ）で有名なところで、ここよりも下流にはアユ釣り師をたくさん見かけていたのでまさかと思った。彼らは命がけの釣りをしているのか、はたまた、遭遇してもうまく対応できるので平気なのか興味のあるところであった。この後の山中での植樹時には爆竹を鳴らしたが、川でも状況がわからないよそ者にはそのような準備が必要かもしれない。永井さんによると白神自然学校がある鰯ヶ沢町ツ森地区は白神マタギの里だったそうだ。

＜永井代表のお話など＞

地酒「安藤水軍」やトチバニンジン酒をいただいたりして、二夜にわたって永井代表からは白神山地を守る活動についてのお話を聞かせていただいた。ブナの森に来ていただいたからには、まずは空気と水（軟水）が美味しいことを味わって実感してほしいとのことだ。お水は確かにまろやかでおいしかった。ブナの植樹を続ける中で1982年からの青秋林道建設に対する反対運動、さらにブナ林の価値が見直され保全への流れが大きくなり世界遺産登録にまで至った。また、世界自然遺産区域が隣県（秋田県）にまたがる中で、両県での保全に対する考え方の違い、特に入山規制に関する方針の違いからくるジレンマなど、ここに至るまでにはいろいろとあったが、これからも一生植樹を続けるという。これをしなければ前に進まないと強い覚悟を持った言葉は実に重みがあった。氏の父が営林署に勤めていたことから幼少の頃から木に親しみがあったという。どうやら、森を守る原点はここにあるようだ。さらに、最近の異常気象が気になるという。日本海の海水温が上昇して、ここ白神の気候も変わってきたように思う。これが色んなことに影響するのか、黄砂まで飛んできてブナの葉に付着することもでてきたと・・・。ビジターセンターの資料には温暖化の条件によっては白神山地のブナの森の多くが



失われるという研究結果もあると記されていた。

我々は十二湖見学の後、黄金崎にある不老ふ死温泉（海岸にある露天風呂が有名）に入り、「わさお」とその家族にも会って、青森空港に向かった。猛暑を忘れ、雨にお付き合いした3日間であったが、「この雨はまさに森・里・海を繋いでいる川を通して白神の地と海にたっぷりと恵みの雨をもたらしていることを実感した。これこそが森里海連環学だ」との田中先生の言葉で締めくくった。永井代表、吉尾さん、田中先生、岩佐、藤原両スタッフをはじめみなさん大変お世話になり有難うございました。



<この機会に森の価値を今一度考える>

●森は海の恋人であるとともに川の恋人でもある

今回は熊に遭遇して釣りができなかったが、以前に訪れた時は実によく釣れた。私は渓流釣りが好きで、主に紀伊山地の渓流にアマゴ（ヤマメの近縁種）をもとめてよく釣りに出かけた。アマゴが釣れる場所は川でも最上流の森に囲まれて、冷たく透き通った水が流れているところだ。そのままでも飲めそうな水の中から 30cm ものアマゴが釣れることがあるが、この水には魚をここまで育てるのに必要な栄養があるとは到底考えられない。一体アマゴは何を食べてこんなにも大きくなるのだろうか。実はその食べ物は川の中にあるのではなく川面を覆っている木々の葉についている陸生昆虫とその幼虫たちだ。何かのきっかけで水面に落下する。特に春から夏には多くの幼虫たちが落下する。それをアマゴはずっと待ち受けている。しかし秋になり落葉が始まると幼虫の落下は望めない。この先は何を食べて行くのだろうか。お腹を裂いて胃の内容物を見てみるとたくさんの水生昆虫の幼虫が出てくる。それではこの幼虫は何を食べているのだろうか。突き詰めれば落ち葉なのだ。落ち葉の一部は河床の石と石の間にたまり、それが微生物により分解されていく過程で、多くの水生昆虫の幼虫の餌として利用されている。川

面の落ち葉の半分が食べられているともいわれている。まさに森からの恵みが上流に棲む生き物の命を支えているのだ。一般に川の上流部は栄養分が少なく、また樹木で覆われているために日が当たらず石にコケ（餌となる付着藻類）がつきにくく、多くは森の葉に依存している。豊かな落葉樹に囲まれた森の川は魚影が濃いことが頷ける。森は川の恋人でもあるようだ。

●そして森は大気の助人でもある



霧の中のブナ林を散策する（十二湖周辺）

今年は今までに経験したことのない酷暑、豪雨が発生している。この原因には地球温暖化と都市部ではそれに加えヒートアイランド現象が大きく関与していることは疑いのないことだろう。すでに熱中症などの生存基盤を脅かす事態が多発しているのであるからこのまま放置するわけにはいかない深刻な問題となっている。田中先生のお言葉をお借りすると「気づいているのだがもう一歩踏み出せない」というのが現状だ。温暖化対策としてCO₂を抑制するには、経済活動への規制はもとより個人にも日常生活（電気、ガス、ガソリンの使用制限、その他もろもろ）の質を落として排出量を抑えることが求められるのでそんなにた易くできるものでないと思う。

ところで、今までに人為的に大気中へ放出した温室効果ガス（温暖化の原因）のうち、約3/4は「化石燃料」を燃やしたことが原因であることはよく知られているが、残りの大部分が、土地の使い方が変化したこと、特に森林を農地や住宅に変えたことなどが原因とされていることはあまり知られていない。裏を返せば、自然環境を守っていれば温暖化のスピードは今ほどではなかったと思う。そこで、考えられているのが森林のCO₂吸収能力を活用することである。つまり原点に返り自然の力を利用することである。簡単に言えば植林である。森林でなかった土地への植林、破壊した土地への植林、都市緑化などによる植生回復、またスギ・ヒノキの木材資源の有効活用などである。木を植えることや自然保護は個人のライフスタイルの変更や経済活動に規制をかけることよりも一歩が踏み出し易いように思う。

人間は猛暑であっても、クーラーを使うなどして、だまし、だましてその場をしのいでしまう。しかし、生き物にはそれが出来ない。自然に触れ合う機会の乏しい都市に生活していれば、なおさら彼らの苦悩が見えてこない。見えなければ配慮もできない。その場しのぎの対応は次の一步踏み出す機会や覚悟を失ってしまい、結局は自然からの恵みをすべて失うことになってしまいかねない。シニア自然大学生は多種多様な自然に接する機会を多く経験しており、自然環境の変化をいろんな角度から察知している。微力なことかも知れないが、その変化を世間に情報発信することは、「気づき」を提供する視点からとても重要なように思う。

<その他>

●アクセス

大阪（伊丹）→青森空港（1時間25分）、青森空港→五所川原（立佞武多の館）（約45分）、五所川原→白神自然学校ツーツ森林校（約1時間）

●マザーツリー

ブナ巨木の愛称、所在地は西目屋村、胸高直径148cm、胸高幹回り465cm、樹高30m、推定樹齢400年（平成10年測定）

●奥赤石ブナ遺伝資源保存林

日本海型ブナ遺伝子の保存を目的。過去に伐採された形跡もなく、白神山地世界遺産地域内のブナ等の広葉樹と同等に生育している

●わさお

見た目がブサイクなのにかわいいという意味合いから『ブサかわいい』と、インターネット上に掲載されたことがきっかけで、今では全国的に有名になった1匹の秋田犬。H23.3月に映画「わさお」が全国放映。